学術研究
コラム

日進月歩！日々新しくなる糖尿病治療

糖尿病・内分泌内科医師　森　芙美

今年はインスリン生誕100周年となります。100年前の1921年、カナダでインスリンが初めて1型糖尿病患者さんに投与され、不治の病で死を待つばかりの患者さんに生存の希望・ミラクルが起きました。（図1）

あれから100年が経過し、糖尿病のお薬は劇的な変化を遂げました。より低血糖が少ない薬、腎症や心臓病への保護効果がある薬が開発され、最近では注射でしか投与できなかった薬剤が内服や点鼻薬で投与可能となるなど、以前では想像できなかったような医学の進歩を目にします。また注射製剤も週1回製剤や合剤が開発され、血糖測定器も、より痛みが少なく使用しやすい形になり、24時間血糖を持続的に測定できる器械も進歩し、より便利に血糖コントロールができるようになっています。（図2）

図1　不治の病からの脱却
～1921年　インスリンが発見された！～

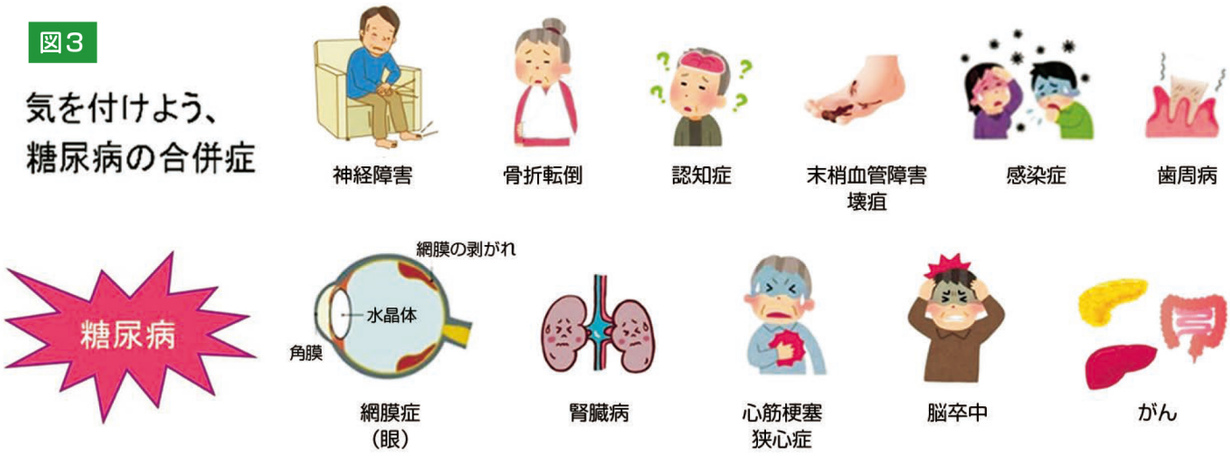
この功績でBantingらはノーベル賞を受賞

図2　日進月歩！糖尿病治療

こうした治療の変化は、糖尿病患者の寿命にも大きな影響を与えました。2001 ～ 2010年の10年間の日本人糖尿病患者さんの平均寿命は男性71.4歳、女性75.1歳で前回の1991 ～ 2000年に比べ、男性で3.4歳、女性で3.5歳延長しました。また30年前の1971 ～ 80年の調査時より、男性で8.3歳、女性で10.2歳延長しており、日本の糖尿病患者さんの寿命が着実に伸びていることが示されています。

我が国でも、肥満、過食、運動不足といった生活の変化に伴い、4人に1人の方が糖尿病もしくは予備軍といわれています。血糖値が高い状態が持続すると合併症の発症する可能性が高まります。（図3）糖尿病は『治す』病気ではなく、『コントロールする』病気です。治療の主役は患者さん自身であり、治療のゴールは、血糖をよく保つことで合併症の発症・進展を予防し、糖尿病を持たない人と変わらない健康寿命、人生を送ることです。

新型コロナウイルス感染症の重症化危険因子にも糖尿病、肥満はあげられており、外出や交流できないストレス、過食、運動不足など治療を難しく感じながら過ごされている方もおられるかと思います。当院でも糖尿病チームの医師、看護師、栄養士、薬剤師、理学療法士、検査技師、歯科衛生士と様々な職種の専門スタッフが、皆さんをお待ちしています。いま一度、自分にとって健康とは何か、どのように生きていきたいかを共に考え、食事療法、運動療法、薬物治療の見直しを含めた患者さんの健康維持のお手伝いができるよう、チーム一丸となって取り組んでまいりますので、お気軽にご相談ください。

図3

気を付けよう、
糖尿病の合併症